



四旬節第 4 主日 (ヨハネ 3:14-21)

世は光よりも闇の方を好んだ

四旬節第 4 主日を迎えました。あと 2 週間で聖週間というところまで典礼が進んでいます。これからの 2 週間、受難と復活を通して救いを完成されるイエスに一步ずつ近づく日々をしたいものです。

今年長崎教区は信徒発見 150 周年を記念するためにさまざまな公式行事を組んでいます。その中で 3 月 17 日国宝大浦天主堂での信徒発見ミサは記念の頂点です。教皇特使も招かれています。同じミサは教区シノドスの閉会も兼ねています。

わたしはこう考えます。信徒発見 150 周年を記念し、教区シノドスを閉会することは、これまでの土台にしっかり立って、これから新しい歩みを始めるという意思表示ではないでしょうか。無事に行事が終わったねで終わらせてはいけないと思います。

信徒発見までの日本の教会が受けた迫害は、長い影を連想させます。影が長いのは、光から遠く離されてしまった時代だったからだと思います。光とは、教会を照らす光、イエス・キリストです。迫害の中で日本の教会の信徒たちは、教会を照らす光を間近で仰ぐことができませんでした。

長い影にたとえた迫害の 260 年は、長崎の信徒発見で光に照らされました。大浦に建てられた外国人のための聖堂に浦上の信徒が勇気を出して出向き、当時のプチジャン神父に「ワレラノムネ アナタノムネトオナジ」と信仰を言い表したのです。どんなに影が長くても、その影に隠れておびえるのではなく、勇気を出して司祭に近づいたので、光であるイエス・キリストに照らされることができました。

信徒発見の出来事が今週の福音朗読箇所を考えるヒントになります。「真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために。」 (3・21)

260 年もの間、迫害によって光から遠ざけられていたクリシタンたちが、山の上に光を置いたプチジャン神父のおかげで光であるイエス・キリストの方に来ることができました。プチジャン神父が導いたというよりも、プチジャン神父が大浦に灯した「光であるイエス・キリスト」に導かれて浦上の信徒が来たのです。

どんなに影が長くても、たとえ 260 年という長い影を歴史に残したとしても、光であるイエス・キリストにくまなく照らされれば長い歴史の影は光に包まれます。260 年の長く暗い影は影のままで終わらず、信徒発見の出来事によってすべてが明るみに出されたのです。

「光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。」 (3・19) 信徒発見から 150 年が過ぎました。信徒発見の出来事は、長い影に覆われていたクリシタンに光がさした出来事でした。今わたしたちに期待されていることは、わたしたちの信仰を公にすることだと思います。光であるイエス・

キリストが世に来ていることを、闇の方を好む人々に示すことだと思います。

光よりも闇の方を好む人々とは、イエス・キリストに照らされることを好まない人々ですが、それはカトリック信者の中にもいるかもしれません。カトリック信者でない人の中にいるかもしれません。そうした人々に、「わたしは光に照らされて生きることを選びました。あなたは光に照らされずに、闇を好むのですか？」こんな意思表示をして、光に照らされる生活に招く。これが信徒発見 150 年を迎えたわたしたちの取るべき姿勢だと思います。

自然の光は、しばしば暖かさを伴います。春の光は、ようやく寒い冬が終わりを告げることを感じさせます。そのように、わたしたちが光であるイエス・キリストに照らされる生活を選んでいると証しするなら、わたしたちを通して人々がイエス・キリストの暖かさ、イエス・キリストの愛を感じ取ることができます。

イエス・キリストがわたしたちを愛し、いのちをささげて守ってくださることを伝えたなら、その先のこと、光であるイエス・キリストに近づくのか遠ざかるのかは本人に委ねましょう。

大きな節目を迎えた長崎教区の信徒の誰もがができること、光の方に来る生き方、光であるイエス・キリストに近づく生き方が、一人でも多くの人に受け入れられるように、このミサの中で願いましょう。